

## CL 寓話

### 夢を飛んだ三男

David K.Reynolds 著 本多岩夫訳  
“Water Bears No Scars” -Wings- p151



ヨーロッパのある城下町に、三人の兄弟が住んでいた。学校に入る年齢になった頃から、三人は大空を飛びたいという欲望の虜になった。獲物を狙うハヤブサは、いとも易々と滑空し、獲物目がけて力強く敏捷に突進する。トビは、城壁の上空を、空高く力強く進む。無限の空間に舞い上がれたら、何と素晴らしいことだろう！ やがて兄弟たちは大人になった。

長男のカールは、鳥について研究し、翼や羽の構造を詳しく知った。何度も何度も、鳥になった夢を見たが、決して飛ばなかった。

次男のカートは、自分について研究した。飛ぶことを妨げている身体上の条件を詳細に学習した。内省し、自分の限界について考え込んだ。彼もまた飛ばなかった。

三男のケ빈は、いろんな方法——科学、工学、機械技術、経営経済学などの方法——を研究した。模型を作り、試作し、そしてついに空を飛ぶ機械を作った。彼は飛んだ。

ケ빈が兄たちに、自分の空飛ぶ機械と一緒に乗るようにと頼んだが、断られた。騒々しくて危険な機械仕掛けなど、カールの夢には思いもよらぬことであつたし、カートにはいろんな構造上の弱点を持つ自分をこの装置が運べるという確信が持てなかつたのである。

ケ빈だけが飛んだ。ハヤブサと競走し、トビの周りを回った。その後も彼は、素晴らしい機械を発明し続けた。

夢見るだけに留まらなければ、夢を見るのは悪いことではない。内省だけに留まらなければ、内省することは何ら悪いことではない。効果的な行動のために方法を学ぶことが大切である。心理学的、政治的であれ、あるいは芸術的で機械的な方法であれ、それらは精神的な堂々巡りをせず行動する道具となる。

方法は、実践的な生活をするための体験学習を深める。適切な方法を習得して夢を実現したら、次のことに取り組んで先に進んでいける。

 [目次へ戻る](#)